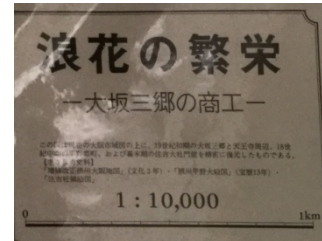


浪花の繁栄—大坂三郷の商工

昔から地図を見るのが好きだった。表題は大阪市立中央図書館にあった「古地図」。とても重くて、大きな地図なので写真を撮るのに苦労したが、興味深いので紹介したい。

表題「大坂三郷」についてネットで調べてみた。「大坂三郷」とは、江戸時代の大坂城下における3つの町組の総称であり、北組・南組・天満組の3組からなり、江戸時代の「大坂町」とは、この3地域を指す。「大坂町奉行」支配下のもとにつくられた町組である。この古地図では三郷のほか、天王寺周辺なども掲載されている。



写真の2枚目。現在の「中之島」界わい。びっしりと各藩・大名の名前が並んでいる。これほど並んでいるとは、この地図を見るまで考えていなかった。



当時の大坂は「天下の台所」と言われた。なかでも中之島が日本有数の「商い」の中心だった。各種卸売業、総合商社もこのあたりから育ったものが多い。それが本社機能の東京移転が続き、東京との格差は歴然としている。大阪の「地盤沈下」だ。



次の写真は「四つ橋」から「堀江」あたりだ。前にレポートしたが、地図にも四つの橋が懸っている。最近よく歩くルートだ。地下鉄御堂筋線「心斎橋駅」で降り、この「四つ橋」を通り、西長堀に向けて広い道路を進む。地図の「高知藩」あたりが、現在の土佐稲荷神社、大阪市立中央図書館だ。古地図もそこで撮った。「堀江」界わいは通りを一本入ると、なんだか違った気分が味わえる。



下の写真には「島之内」「難波村」「天王寺町」などの地名が見える。現在も四天王寺から北に歩くと、たくさんの寺院が立ち並んでいるが、古地図からもはっきりと分かる。19世紀初期の「大坂のまち歩き」が楽しめた。

(2016年12月23日)